

芥川龍之介・作 杜子春 より抜粋

「お前は何を考えているのだ」

片目眇の老人は、二度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけてました。勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っているのです」

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが面白い。きっと車に――」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮りました。

「いや、お金はもういらぬのです」

「金はもういらぬ？ ははあ、では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」

老人は審しそうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想がつきたのです」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳貪にこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になつたところが、何にもならないような気がするのです」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。

「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏を

しても、安らかに暮して行くつもりか」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になって、仙術の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えてください」

老人は眉をひそめたまま、暫くは黙って、何事か考えているようでしたが、やがて又にっこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉山に棲んでいる、鉄冠子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になり

たければ、おれの弟子にとり立ててやる」と、快く願を容れてくれました。

1998年5月20日

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。